

三原麻里さんインタビュー 「オルガン×エリザベート」にかける思い

オルガニスト三原麻里さんは幼少期からミュージカルが大好きで、中学・高校時代の部活動では自らもステージに立っていたとのこと。ご自身も何度も鑑賞してきた傑作ミュージカル『エリザベート』とオルガンとの“掛け算”にかける熱い思いを語っていただきました。

◆三原さんのミュージカル愛

オルガンは教会とともに発展してきたこともあり、厳かな音楽のイメージを持たれることが多いと思いますが、実際は軽妙な表現から荘厳な響きまで、幅広い表現ができる楽器です。私自身、昨年の「オルガン×ベルサイユのばら」を鑑賞し、本当にいろいろなことができる楽器なのだなあと、あらためて実感しました。

私のミュージカルに対する思いは強く、おそらく最初のミュージカル鑑賞は幼少期で、「劇団飛行船」の公演だったと思います。劇の中で登場人物が歌い、踊り、セリフを言うというのが、私にとってはとても自然なことでした。中学・高校時代の部活動はミュージカルに取り組む「音楽部」に入部しました。女子校でしたから、宝塚のように男役も自分たちでこなしながら、ブロードウェイ・ミュージカルやオリジナル作品を、みんなで手がけていきました。私はピアノで伴奏することが多かったけれど、全員が歌って踊って出演するのが決まりでした。なので、私もしぶしぶ踊れないダンスに挑戦していましたね(笑)。もちろん劇団四季や宝塚など、本格的なミュージカル公演もたくさん鑑賞してきました。

◆『エリザベート』はパワフルな作品

1996年に宝塚歌劇団が上演し、2000年から東宝でも制作されてきた『エリザベート』というミュージカル作品は、オーストリアのハプスブルク家最後の皇后エリザベートを題材とした物語です。彼女の悲劇的な人生を、黄泉の国の帝王トート(死)とのラブストーリーという方向でまとめ上げていく物語性、そしてなんといっても楽曲がいずれも魅力にあふれ、とてもパワーのある作品だと思います。まさか自分がオルガニストとして、この大好きな作品に関われる日が来るとは思っていなかったもので、とても嬉しく光栄です。

そして今回は花總まりさんと浦井健治さんによる朗読との共演ということで、この作品の世界観を大切にしながら演奏したいと思います。花總さんは宝塚の舞台をずっと拝見してきましたし、浦井さんの演じる「ルドルフ」も大好きです。お二人やこの作品のファンの方が多いですから、朗読とオルガンの生演奏で聴けてよかったです！とっていただけるステージにしたいです。

◆注目してほしい楽曲

ミュージカル『エリザベート』で、第1幕にオルガンが鳴り響く場面があります。エリザベートと皇帝フランツ・ヨーゼフとの結婚式のシーンで、ハプスブルク家の終焉がここから始まったことを伝える重要な場面です。ここでは「不幸の始まり」という楽曲が流れ、印象的にオルガンが鳴り響きます。今回の公演では、サントリーホールの大オルガンを用いた、生演奏ならではの迫力を感じていただけたと思います。まるで、客席の皆さんもその結婚式に参列されているような、リアルな感覚を味わえるかもしれません。

また、たくさんキャストが並んで歌い踊る「ミルク」という曲があります。原曲ではミュージカルらしくドラムセットが入ったナンバーですので、こういった楽曲もオルガンで奏でるとどうなるのか、ぜひご期待いただきたいですね。私自身もワクワクしています。

全曲のアレンジは、オルガンを知り尽くした作曲家・坂本日菜さんです。足鍵盤によってメロディーを演奏したり、激しいリズムを担当するパートもあります。私が普段演奏しているクラシックのオルガン作品では出てこないような表現も求められるので、そのあたりは私にとってもチャレンジです。

◆本格的なプロダクション

今回の公演は、東宝株式会社の協力を得て、原作ミュージカルを生んだウィーン劇場協会、そして脚本・歌詞を書かれたミハエル・クンツェさん、音楽と編曲を担当されたシルヴェスター・リーヴァイさんにも関わっていただき、実現できることになりました。朗読とオルガンという編成ながら、本格的・公式的な公演となりますので、私も命を燃やして頑張ります！本公演ならではの『エリザベート』の世界をお楽しみいただければ幸いです。